

田口竜雄君をいたむ

畠 山 久 尚*

田口竜雄君は、昭和36年の秋から体に異常を感じられ、好きな酒もつつしんでおられたが、12月12日には高岡市にある豊協高岡病院に入院された。診断は肺癌ということで、昭和37年1月3日夕刻卒然として死去された。明治37年6月1日の誕生であつたから、満57才7カ月であつた。田口君は学問的にも数々の業績を挙げておられるし、これからもまだまだお仕事の出来る人であつたのに、惜しいことをしたものである。

田口君は大正11年3月富山県立高岡中学校を卒業して、海洋気象台（現在神戸海洋気象台）に入り、終始図書掛の仕事をしていた。君の昔の資料に基づき編さんや調査は、この期間に主として行なわれ、また基礎をおかれたものである。昭和17年には郷里の伏木測候所長に変わったが、外地勤務の技師が多くなるに伴い、富山測候所長が本務となり伏木測候所長と富山航空気象観測所長とを兼務し、後には泊観測所長をも兼務した。昭和25年には東京管区気象台の勤務となり、やがてその調査課長となった。昭和28年からは福井測候所長、翌29年には再び伏木測候所長に戻つて現在に至つた。

田口君の編著書としては、まず中央気象台、海洋気象台の名で出ている「日本気象史料」、「同追補1」、「同追補2」（何れも昭和16年）、および田口編として地人書館から発行された「日本気象史料総覧」（昭和18年）を挙げなければならない。これらの資料はその後の気象学者および気象技術者によく利用された。気候の長期変動の資料としても利用価値があるが、田口君自身もそういう調査報告をいくつも出している。古今書院からは田口君

自身の名前で「雪」（昭和15年）「風祭」、「続風祭」（何れも昭和16年）、「日本の海」（昭和31年）などがある。

我々はこれらの著書によつてどれだけ啓発されたかわからないし、また色々の場合にずい分利用させても貰つた。最近には「日本の風」の原稿をまとめられていたが、これは気象協会から出版の予定で、その準備が進んでいる。はからずもこれが遺著となつてしまった。

研究論文や調査報告としては、「海と空」、「海洋時報」、「天気と気候」、「気象集誌」、「雪氷」、「北陸気象研究会誌」、「東管気象研究会誌」、「研究時報」等に発表されたものが総数60数篇に達する。内容は史料に基づき気候学的、季節学的なものから、海洋に関するもの、富山県の地方気候誌まで広い範囲に亘っている。

昭和34年6月1日の気象記念日には財団法人岡田武松先生記念会から岡田賞を受けられた。これは田口君が古文書史料によって日本の気候変動の実態を明らかにしたばかりでなく、気象界に独自の分野を開拓し発展した功績が認められたものと考えられる。

田口君は日常ささいなことにはこだわることなく、実に豪快な気質の持ち主であつた。この性格は公私ともに親愛する人々を作り、君の仕事の成功はみなその純粋な誠実さから生まれたものと信ずる。田口君は平素頑健な体の持ち主であつたのに図らずも病を得て、しかも療養いくばくもなく死去されたことはまことに残念である。

1月6日午前11時から高岡市伏木石坂法林寺で葬儀が行なわれたが、参列した気象台関係者はその午後伏木測候所に集まつて田口君をしのぶ座談会を催おし、君の各時代における逸話などを語り合った。そのメモもとつてあるが、それは別の雑誌に印刷になることであらう。

* 東京管区気象台長